

2023年1月15日 主日礼拝 二十歳の感謝のとき

説教題「聖なる者となれ～欠けある私のままで～」レビ記 19 章 1～2、9～18 節

主任牧師 加藤 誠

**「あなたがたは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である」(レビ記 19 章 2 節)。**

新しい年が明けて間もなく、神社に初詣した人たちへのインタビューが新聞に載っていました。コロナ禍で仕事を失い転職した人が「今年こそ安定した収入を！」、教師が「三年間コロナに振り回され学校現場は混乱した。今年こそ落ち着いてほしい」、また物流で働く人が「通販の大手は配送無料を謡っているけれど、そのしわ寄せが物流の末端業者に来ている。根本的な構造が少しでも良い方向に変わってほしい」など、暮らしの切実な願いが語られていました。そのように生きるための素朴な願いを抱えて日々を生きている私たちに、聖書はどのように祈ることを教えてくれているのでしょうか。神社での祈りと何か違いがあるのでしょうか。

主イエスは「主の祈り」で「我らに日用の糧を与えたまえ」と祈ることを教え、「わたしの名によって願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる」(ヨハネ 16・23-24)と言われているから、私たちは日ごとの必要や素朴な願いを祈ってよいのです。ただ、私たちの願いを祈るだけで終わらないように、そこに「二つの祈り」を加えていくことも主イエスは教えておられます。

一つは、こちら側の願いを祈るだけでなく、「神さまは私に何を期待しておられるのですか？」と、神さまの祈り、神さまが望んでおられることを教えてくださいと祈ること。もう一つは「もしわたしの願う通りにならず、困難に襲われたとしても、神さまと共に歩む信仰を与えてください」と祈ることです。それは、私たちの願い通りにはなかなか事が運ばない、荒れ野のような世界の現実において、なお「神さまの恵みを見出していく信仰を与えてください」と祈ることです。

今から 28 年前の阪神淡路大震災の時、神戸の教会が地域の避難所になった時、わたしは教団讃美歌の 316 番に深く支えられました。「1 主よ、こころみ うくるおり、いのりたまえ わがために。こころおそれ 迷うときも、あいのみかお向けたまえ。 3 わずらわしき 世のわざに、やるせもなき かなしみに、なおひそめる いつくしみを、見させたまえ あやまたず」。インマヌエルの主であるイエス・キリストが、私たちの命の一番厳しい現実と一緒に歩んでくださっていることは深い慰めです。「どんな暗闇の中でも、キリストの慈しみを見出すことができますように、信仰を与えてください」という祈りをささげていきたいのです。

さて、今朝はレビ記 19 章の「聖なる者となりなさい」と主なる神が呼びかけている箇所を取り上げました。これは今お話しした最初の祈りに呼応するものだと思います。私たちの側の願いを祈るだけでなく、神さまが願っておられることとして

「聖なる者になりなさい」という言葉を聴くのです。その場合に「聖なる者になる」とは「主なる神と隣人を、日々愛する者になる」ことであり、具体的な実践が示されていて、いろいろと考えさせられる箇所です。

ただ、この19章で私たちに求められている具体的な実践を読めば読むほど、自分たちが神さまの望まれる「聖なる者」にはほど遠いものであることを思い知らされます。このレビ記の神さまの語りかけを聴いたイスラエルの人々もそうでした。彼らはエジプトの地から救い出された後、約束の地に入るのに四十年かかりました。ふつうに旅をすれば一か月から二か月で着く距離をです。なぜそんなにかかったのか。聖書によると、イスラエルの人々の不信仰があまりにひどいので神さまが怒られたからです。彼らは死ななければならなかった。つまり「新たに生まれ変わることを」を期待されたのです。その結果、四十年の旅を通して彼らは「新生」できたのでしょうか。いいえ。残念ながら彼らは相変わらず不信仰のままでした。ほとんど何も変わりませんでした。では四十年の旅は無意味だったのでしょうか。いいえ。彼らは三つの大切なことを学んだのです。

①自分たちは自らの不信仰を克服しえない、弱く小さき者であること。

②にもかかわらず、神は深い愛と忍耐をもって共に歩んでくださること。

③この神の深い慈しみにつながらずして、自分たちは生きることができないこと。

自分たちの不信仰は自らの力では決して克服できず、神さまの慈しみにつながらずして幸いを生きることができないことを、荒れ野の四十年を通して彼らはとことん学んだのでした。「聖なる者」とは「神のものとなる」という意味であり、「神さまの恵みにしっかりつながって生きる」という意味であり、「聖なる者となれ」とは「神の恵みから離らずにしっかりつながって生きよ！」という意味なのです。

ルワンダで活動している佐々木恵さんは最新の報告で、欠けある私たちが神の深い慈しみにつなげられ生きる祝福と希望について、こう記しています。

「私は常々、ウムチョ・ニャンザの女性たちの言葉には力があると感じてきました。彼女たちが『断絶』ではなく『和解』を、『憎しみ』ではなく『愛』を選び取ってきたその生きざまに『神さまによる愛の力そして希望』を見るからです。そしてその言葉が、聴く人の心に新たな『希望』を与えうると思えるからです。…この女性たちが決して聖人というわけではなく、私と同じような欠けのある存在でありながら、希望の光を指し示し続けてくれていることに、神様から与えられている祝福を感じています。私も欠けのある存在のままで主が用いてくださるということを感じることができるからです。」（ウブムエ 62号）。

私たちはいわゆる「聖人」にはなりきれないけれど、神さまの愛と正しさにつなげられる時、私たちは「欠けある私のまま」で用いていただける、「神のもの」「聖なる者」とされていくのです。この恵みを大切に生きていきたいと思えます。